

# さといも「土垂」の8月どり栽培における被覆資材の検討

東北農林専門職大学附属農林大学校 野菜・花き経営学科 野菜コース 青戸 翔汰朗

## みどり戦略との関連性

気候変動に適用する被覆資材を利用したさといもの8月どり生産安定技術

## 課題設定の理由

私の住んでいる山形県中山町は、「芋煮会発祥の地」と言われており、9月に開催される元祖“全国”芋煮会には多くの人々が訪れる。そんな中山町だが、これまで芋煮では欠かせない「さといも」の生産が活発に行われていなかった。そこで、8月に高単価で取引されることや、芋煮会発祥の地で作ったさといもを販売したいという思いから8月どり栽培でのブランド化を目指している。そのため、8月に安定出荷できる栽培技術の確立が必要と考え、被覆資材の違いが収量におよぼす影響について調査した。



図1 収穫の様子（8月26日）

## 試験方法

- 被覆資材として農POと農ポリを使用し、被覆しない区は無処理区とした。
- 被覆時期は定植直後4/22～6/18までとした。

## 試験結果

- 定植後1か月の地温は期間を通して農PO区が最も地温が高かった。（図2）
- 子いも及び孫いもの数は農ポリ区が最も多かった。（表1）
- 被覆していない無処理区はB品の数が多かった。（表1）
- 商品化収量は農PO区が最も多くなり、次いで農ポリ区となった。（図3）
- すべての区で目標とする1t/10aの収量が得られた。（図3）

表1 規格別収穫個数調査（8月26日） 5株あたり

試験区	子いもA品 (個)	子いもB品 (個)	孫いもA品 (個)	孫いもB品 (個)	合計 (個)
農PO区	18	28	14	55	115
農ポリ区	17	36	15	56	124
無処理区	8	30	13	62	113

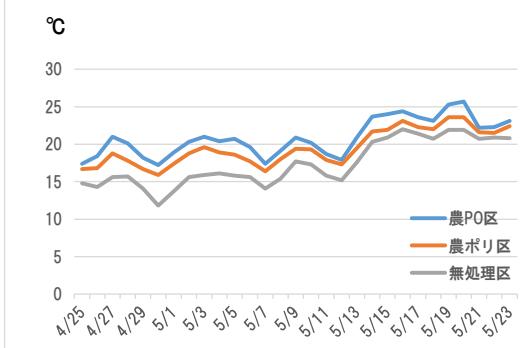


図2 定植後1か月の地温の推移

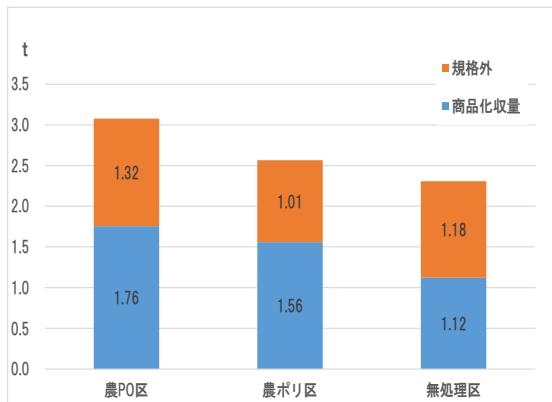


図3 収量 (10aあたり)

表1から農ポリ区の子いも・孫いもの数が最も多く、ほか2区は同じだった。しかし、図2をみると農PO区の商品化収量が最も多く、次いで農ポリ区となった。これは被覆したことによって気温、地温を確保でき、初期成育を促進できたためと考えられた。

※参考文献等：さといも出荷規格表（山形県青果物等標準出荷規格より）  
サトイモの早掘り栽培と培養苗の簡易増殖法の検討

（平成14年 園芸経営学科 野菜コース 永山裕和）